

1 東京都・大阪市中心卸売市場の需給動向(令和7年3月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万1446トン、前年同月比96.8%、価格は1キログラム当たり338円、同110.6%となった。
- 大阪市中心卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万4429トン、前年同月比97.5%、価格は1キログラム当たり304円、同116.9%となった。
- 春野菜は順調にスタートし、市場価格は落ち着き平年並みかやや高い水準で推移すると予想される。

(1) 気象概況

上旬は、全国的に天気は数日の周期で変わり、北日本は高気圧に覆われやすく、東日本太平洋側と西日本は低気圧や前線の影響を受けやすかった。旬平均気温は、西日本、沖縄・奄美で高く、北日本、東日本で平年並みとなった。旬降水量は、2～5日頃にかけて、暖かい高気圧と大陸から張り出す冷たい高気圧の間の本州南岸付近に前線が停滞し、前線上の低気圧の影響などで東日本太平洋側でも雪が降った所があった。また、5～6日にかけて発達しながら日本の東を北東進した低気圧の影響で、北日本太平洋側ではまとまった雨や雪となった所があり、旬間日照時間は、北日本で多く、東日本太平洋側、西日本では少なかった。

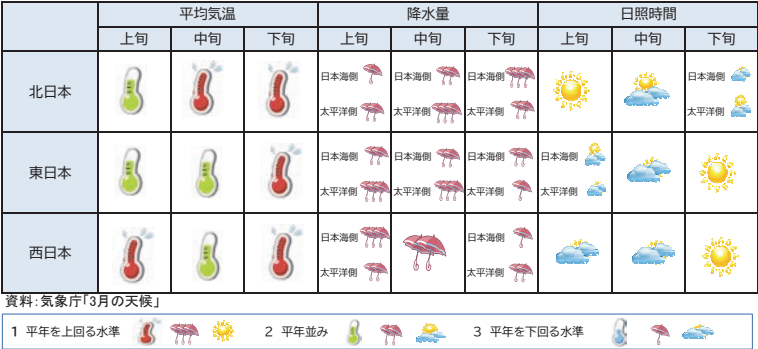
中旬は、全国的に天気は数日の周期で変わり、北日本太平洋側、東・西日本と沖縄・奄美は低気圧や前線の影響を受けやすかった。旬平均気温は、期間前半を中心に寒気の影響が弱かった北日本で高く、期間後半に寒気の影響を受けた沖縄・

奄美で低かった。17日には、発達した低気圧の影響で、北日本の太平洋側を中心に荒れた天気となり、北海道では3月としては記録的な大雪となった所があった。19日には、関東甲信地方の平地でも積雪となった。旬降水量は北・東日本太平洋側でかなり多く、沖縄・奄美で多かった。旬間日照時間は、東・西日本太平洋側と西日本日本海側ではかなり少なく、東日本日本海側では少なかった。

下旬は、南高北低の気圧配置となり暖かい空気が流れ込みやすかったため、旬平均気温は、北・東・西日本でかなり高く、25～27日にかけては、大分県で30.3℃を観測するなど3月の日最高気温の記録を更新した所が多かった。旬降水量は北日本日本海側では低気圧や前線の影響を受けかなり多く、東日本太平洋側と西日本日本海側で少なかった。旬間日照時間は北日本日本海側でかなり少なかったが、西日本日本海側と沖縄・奄美でかなり多く、東日本日本海側と東・西日本太平洋側で多かった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

図1 気象概況



(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万1446トン、前年同月比96.8%、

価格は1キログラム当たり338円、同110.6%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（3月速報）

品 目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	101,446	96.8	87.6	338	110.6	128.5	360	337	321
だいこん	7,950	98.2	85.7	139	133.3	154.5	166	141	117
にんじん	5,236	92.2	82.3	285	141.9	168.8	270	299	283
はくさい	5,505	85.1	73.0	178	126.5	202.8	184	190	159
キャベツ類	14,664	96.4	83.3	172	153.8	187.6	218	181	139
ほうれんそう	1,660	124.2	108.9	462	85.3	106.8	559	428	415
ねぎ	3,045	78.6	76.9	574	167.9	185.6	623	626	500
レタス類	6,574	107.8	96.3	232	93.5	119.4	278	221	205
きゅうり	5,003	102.1	85.7	392	85.5	113.0	388	408	385
なす	1,824	100.8	84.0	493	106.0	117.8	475	534	480
トマト	5,149	112.1	93.5	428	91.7	104.0	436	430	421
ピーマン	2,023	105.4	98.8	707	88.3	105.3	768	706	661
さといも	314	84.7	71.6	395	102.1	125.7	401	405	383
ばれいしょ	5,747	76.6	78.8	237	156.4	131.8	229	230	252
たまねぎ	9,239	88.4	88.0	161	104.9	119.6	162	164	159

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注1：平年比は過去5カ年平均との比較。
注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんは堅調な価格が続き、高値で推移した前年を4割以上上回り、平年を7割近く上回った（図2）。
葉茎菜類は、はくさいの価格は、他品目が増量傾向となった下旬に向け落ち着いたものの堅調な動きとなり、高値で推移した前年を2割以上上回り、平年の2倍強となった（図3）。
果菜類は、ピーマンの価格は下旬に向け徐々

に落ち着き、高値で推移した前年を1割強下回り、平年をやや上回った（図4）。
土物類は、ばれいしょの価格は月間を通して堅調な動きが続き、安値で推移した前年を5割以上上回り、平年を3割以上上回った（図5）。
なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

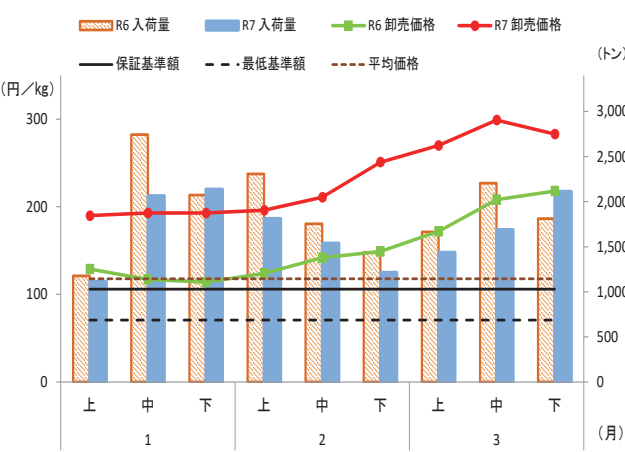


図3 はくさいの入荷量と卸売価格の推移

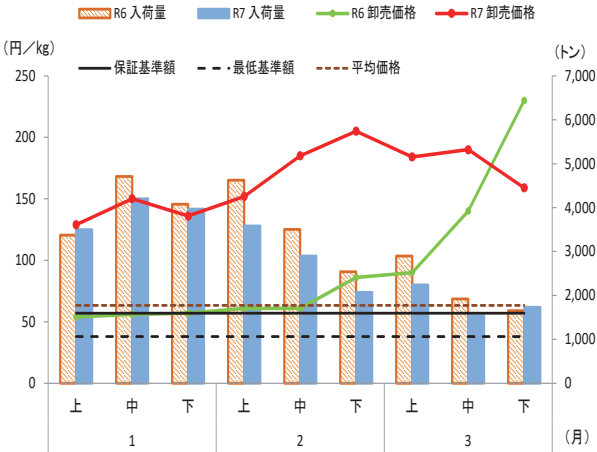


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

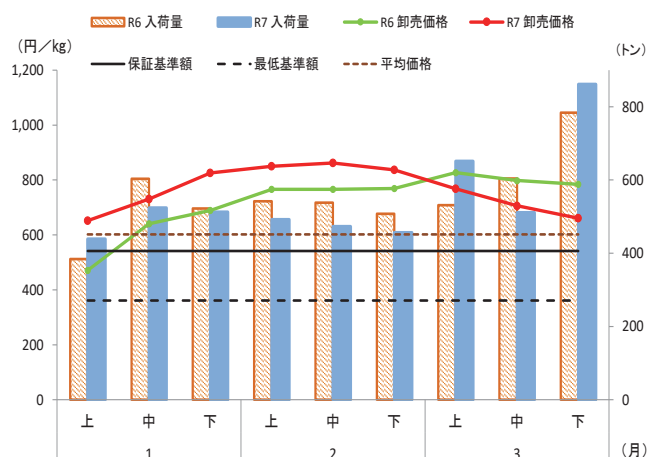
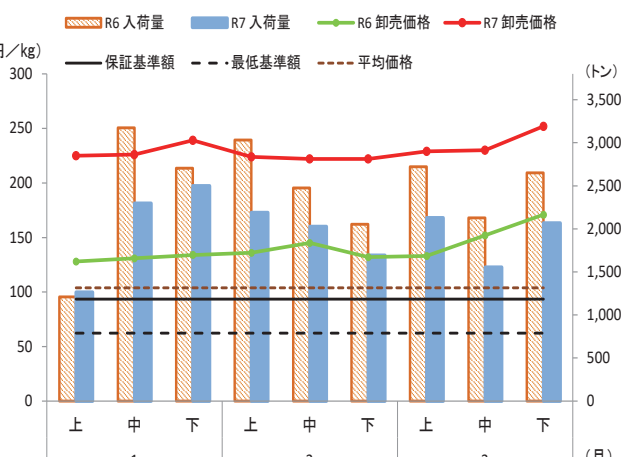


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移

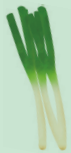


資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、事業における過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	3月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	千葉産、神奈川産中心の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、播種期の乾燥の影響により生育遅れが散見された。全体としてはおおむね良好であるが、病害が散見されている。神奈川産の作付面積は前年をやや下回る。12月からの気温の低下と干ばつの影響で若干の遅れはあったものの、ほぼ解消されている。一部乾燥による根部障害が散見される。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。 価格は、数量が安定した下旬に向けて下がったものの、高値で推移した前年を3割以上上回り、平年を5割以上上回った。
	にんじん	徳島産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、2月下旬までの低温の影響により生育が遅延していたが、3月に入ってから気温の上昇で回復しおおむね順調である。病害虫の発生も少ない。千葉産は終盤で収穫時の天候に恵まれたため、進捗は早く残量が少ない。輸入の中国産は前年をわずかに下回り、総入荷量は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、堅調な動きが続き、高値で推移した前年を4割以上上回り、平年を7割近く上回った。
葉茎菜類	はくさい	茨城産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であり、高値続きから収穫が前進しており、切り上がりは早い。後続の兵庫産を含めた西南暖地は低温による生育遅延に加え、少雨の影響により小玉傾向である。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を3割近く下回った。 価格は、他品目が増量傾向となった下旬に向けて落ち着いたものの堅調な動きとなり、高値で推移した前年を2割以上上回り、平年の2倍強となった。
	キャベツ類	愛知産を中心に千葉産、神奈川産などの入荷があった。愛知産の作付面積は前年並みで、2月の低温・干ばつの影響により生育は10～14日程度遅れ、加えて小玉傾向である。千葉産の作付面積は前年並みで、1月の定期的な降雨により小玉は解消傾向であるが、病害が散見される。神奈川産の作付面積は前年並みで、遅延していた生育は回復傾向となるも小玉が多い。干ばつ傾向の影響により病害は少ない。加工を中心に絶対数不足の為、引き続き輸入が目立った。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、高値からは下旬に向けて落ち着いたものの、高値で推移した前年を5割以上上回り、平年を9割近く上回った。
	ほうれんそう	茨城産、群馬産中心の入荷となった。茨城産の作付面積は前年並みで、ハウス物を中心にやや遅延していた生育は、適度な日照と気温の上昇に伴い回復した。群馬産の作付面積は前年並みで、ハウス物は気温の上昇に伴い回復するも、乾燥の影響で露地作を中心に生育不良である。虫害も多く、品質低下が散見された。総入荷量は少なかった前年を2割以上上回り、平年を1割近く上回った。 価格は、ハウス物の回復に伴い下旬に向けて落ち着き、高値で推移した前年を1割以上下回り、平年をかなりの程度上回った。

	ねぎ 	千葉産を中心に茨城産、埼玉産など関東春作中心の入荷であった。千葉産の作付面積は前年並みで、厳しい低温・乾燥により生育が停滞していたが、気温の上昇と適度な降雨で回復傾向である。ただし、葉の確保が難しく、正品率が低下している。茨城産の作付面積は前年をやや上回り、低温・乾燥の影響による生育停滞からは回復傾向である。埼玉産の作付面積は前年並みで、冬ねぎは終盤である。生育は回復傾向にあったものの、病虫害が散見される。全体的に春ねぎの作況は良くない。総入荷量は前年、平年とも2割以上下回った。 価格は、干ばつによる正品率の低下に加え、低温・降雪などの影響もあり、高値で推移した前年を7割近く上回り、平年を8割以上上回った。
	レタス類 	茨城産を中心に静岡産、香川産などの入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、2月の気温の低下と乾燥による生育停滞から回復し、おおむね順調である。静岡産の作付面積は前年並みで、2月の気温の低下により生育停滞があり、また玉肥大にばらつきが見られたが、天候に恵まれ回復した。香川産の作付面積は前年並みだが、こよう降雹や低温による生育停滞に加え、凍害や生育不良も散見される。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をやや下回った。 価格は、下旬に向けて落ち着き、高値で推移した前年をかなりの程度下回り、平年を2割近く上回った。
果菜類	きゅうり 	群馬産、宮崎産中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれおおむね順調だが、一部乾燥による病害が散見された。宮崎産の作付面積は前年をやや下回り、生育はおおむね順調だが、一部低温の影響による芯止まりや樹勢の低下が散見される。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年を1割以上下回った。 価格は、絶対数不足から月間を通して堅調な動きとなり、大幅に高値で推移した前年を1割以上下回り、平年を1割以上上回った。
	なす 	高知産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、低温により着果数は少ないが、樹勢は回復傾向である。病虫害が散見されているが、被害は軽微である。総入荷量は少なかった前年並みで、平年を1割以上下回った。 価格は、絶対数不足から堅調な動きとなり、高値で推移した前年をかなりの程度上回り、平年を2割近く上回った。
	トマト 	熊本産、栃木産を中心に愛知産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、低温で推移したものの生育はおおむね順調であった。日照不足の影響による着色不良が散見され、小玉傾向であった。また、病害が散見されている。栃木産の作付面積は前年並みで、促成長期採り作型の生育はおおむね順調だが、やや成り疲れで小玉傾向である。促成作はおおむね順調であるが、2月上旬の天候不良で病害が散見された。愛知産の作付面積は前年並みで、低温により若干着色不良で小玉傾向であった。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は、月間を通して安定して推移し、高値で推移した前年をかなりの程度下回り、平年をやや上回った。
	ピーマン 	茨城産、宮崎産中心の入荷となった。茨城産の作付面積は前年並みで、初期生育時の天候不順による生理障害から樹勢が懸念されたが、1月以降の天候に恵まれ回復し、おおむね順調である。病害は少ないが、一部虫害が散見される。宮崎産の作付面積は前年をやや下回る。低温の影響により一部果実の肥大が鈍いが、生育はおおむね順調である。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。 価格は、下旬に向け徐々に落ち着き、高値で推移した前年を1割強下回り、平年をやや上回った。
土物類	さといも 	埼玉産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、生育は良好で収穫は終了しており残量は少ない。輸入の中国産の入荷は、前年を2割ほど下回った。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を3割近く下回った。 価格は、残量が少なく堅調に推移し、高値で推移した前年をわずかに上回り、平年を2割以上上回った。
	ばれいしょ 	北海道産を中心に鹿児島産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで収穫を終了した。干ばつ傾向から気温の上昇と適度な降雨により回復したものの、残量は少なく発芽が懸念される。鹿児島産の作付面積は前年を下回る。霜害や低温乾燥による生育遅延により作柄は不良で、小玉傾向に加えヒヨドリの食害などもあった。総入荷量は前年、平年とも2割以上下回った。 価格は、月間を通して堅調な動きが続き、安値で推移した前年を5割以上上回り、平年を3割以上上回った。
	たまねぎ 	北海道産を中心に静岡産などの入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで収穫を終了した。作柄はあまり良くなく、なみおこ中晩生以降の品種は小玉傾向であった。静岡産の作付面積は前年並みで、昨夏の高湿による生育不良からは回復傾向である。輸入の中国産は前年を3割以上下回った。総入荷量は前年、平年とも1割以上下回った。 価格は、月間を通して安定した動きとなり、高値で推移した前年をやや上回り、平年を2割近く上回った。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、
入荷量は3万4429トン、前年同月比97.5%、

価格は1キログラム当たり304円、同116.9%
となった(表3)。
品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(3月速報)

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	34,429	97.5	93.3	304	116.9	128.8	323	302	291
だいこん	2,031	82.3	80.8	145	155.8	170.6	157	148	133
にんじん	2,326	101.2	102.4	257	132.3	159.4	269	264	239
はくさい	3,156	92.0	90.0	175	118.2	183.5	195	188	152
キャベツ類	4,693	95.9	88.3	150	156.0	185.3	197	154	119
ほうれんそう	543	143.6	113.8	447	79.7	103.0	585	399	391
ねぎ	751	90.2	89.9	641	149.4	173.6	744	675	537
レタス類	1,174	111.1	95.6	212	88.3	111.5	273	193	179
きゅうり	1,120	102.6	85.5	364	83.4	108.6	354	393	357
なす	733	103.2	103.9	446	103.0	114.5	439	467	438
トマト	1,651	133.2	114.4	415	95.5	106.1	411	413	419
ピーマン	614	146.9	145.2	686	85.8	101.9	754	695	628
さといも	50	80.9	68.7	449	115.6	152.5	460	464	424
ばれいしょ	2,978	84.8	93.4	249	167.4	134.9	229	257	266
たまねぎ	4,844	91.2	91.7	146	106.8	117.6	147	154	140

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	3月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	鹿児島産が主体となり、徳島産や長崎産、香川産などの入荷があった。鹿児島産は作柄不良で産地出荷量が少なく、全旬とも少ない状況が続き、月間では前年を大幅に下回った。長崎産と香川産も生育が悪く、出荷の出遅れから月の前半は入荷量が少なく、下旬から増量傾向となったが、月間で長崎産は前年をかなり下回り、香川産は大幅に下回った。徳島産は順調な入荷が続いたが、月間全体では前年、平年ともに大幅に下回った。総入荷量は、前年、平年ともに2割近く下回った。 価格は、全体の入荷量が少なく、安価な九州産の入荷量が特に少なかったため高値で推移し、月間で前年を5割以上上回り、平年を7割以上上回った。
	にんじん 	徳島産と鹿児島産が主体となる入荷であった。秋冬産地の鹿児島産の残量が少なく、上中旬の入荷量は前年の半分程度、下旬は増加したが月間では前年を大幅に下回った。徳島産は出遅れから上旬は入荷量が少なく、中旬以降に増量となったが不安定な入荷であった。国産が小ぶり傾向で入荷が少ないことから、業務用を中心に輸入の中国産の需要が高まり、前年の2.5倍以上の入荷となった。総入荷量は、月間全体では前年、平年ともわずかに上回った。 価格は前月までの単価高の影響が残り、上中旬は高値で推移した。入荷量の増加に伴い、下旬はやや下げたものの、月間では前年を3割以上上回り、平年の6割近く上回った。
葉茎菜類	はくさい 	長崎産が主体となり、後続の茨城産や、愛知産の残量入荷などがあった。上中旬は、低温と干ばつの影響により九州産地の出荷量が伸び悩み、茨城産は出遅れて少なく、入荷量が伸びず中旬に落ち込んだ。下旬は気温も上昇して生育が進み回復傾向となり増量したが、総入荷量は、月間全体では前年、平年ともかなりの程度下回った。 価格は前月までの高値の影響が残る中で、上中旬は入荷量が伸び悩み高値で推移したが、旬を追うごとに下落して下旬には高値疲れにより急落した。月間では前年を大幅に上回り、平年を8割以上上回った。
	キャベツ類 	寒玉キャベツは愛知産を中心に大阪産など、春キャベツは愛知産を中心に和歌山産や兵庫産などの入荷があった。各地とも低温と干ばつの影響が上中旬までは残り、小玉傾向で産地出荷量が少ない状況が続いた。下旬になり気温も上昇して回復傾向となったが総入荷量は伸び悩み、全体では旬を追うごとに入荷増量となったものの、月間全体では前年をやや下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は前月までの高値の影響に加え、上中旬は入荷量が増えなかったことから、高値で推移した。旬を追うごとに下落傾向で推移し下旬には落ち着いたものの、月間で前年を5割以上上回り、平年を8割以上上回った。
	ほうれんそう 	徳島産と福岡産が主体となり、近隣の大阪産や奈良産の入荷もあった。気温が上昇するに連れて生育が進み、適度な降雨もあり各地とも産地出荷量が増えた。下旬に一気に増量し、総入荷量は、月間全体では前年を4割以上上回り、平年をかなり大きく上回った。 価格は、前月までの野菜類全体の高値の影響が残る中、消費が鈍く、入荷増量となるも引き合いが強まらず、中旬以降に急落した。月間では前年を2割以上下回り、平年をやや上回った。

果菜類	ねぎ（白ねぎ） 	群馬産と鳥取産が主体となり、静岡産や埼玉産などの入荷があった。群馬産は前月までの順調な出荷が前進気味となり、旬を追うごとに入荷が減量した。他産地は月の前半の入荷量が伸びず、総入荷量は、月間全体では前年を下回った。 価格は、前月までの高値の影響から上旬までは高値で推移し、旬を追うごとに下落傾向となったものの、月間では前年を大きく上回った。
	ねぎ（青ねぎ） 	青ねぎは徳島産を中心に高知産や香川産などの入荷があった。細ねぎは高知産と静岡産が主体となる入荷であった。各地とも低温・干ばつの影響が残り、出荷量は伸び悩んだものの単価高が続き、量販店・業務関係ともに発注量が少ない状況が続いた。中旬に入荷量が落ち込み、下旬には回復したものの、総入荷量は月間全体では前年を下回った。 価格は、前月までの高値の影響が残り、上旬の価格は前年の2倍以上であったが、旬を追うごとに下落傾向となった。それでも中旬の価格は前年を大きく上回り、下旬の価格も前年を上回った。月間では前年を5割以上上回った。
	レタス類 	玉レタスのラップ物は兵庫産を中心に香川産など、裸ものは長崎産を中心とする入荷であった。上中旬までは低温と干ばつの影響が残り入荷量は伸び悩んだが、下旬には回復傾向となった。全旬・月間とも少なかった前年を上回った。サニーレタスは福岡産が中心となる入荷で、月の前半は低温と干ばつの影響が残り入荷量は伸び悩んだが、後半に回復して増量となり月間では前年を上回った。リーフレタスは福岡産が中心となり、比較的順調な入荷が続いた。レタス類全体の総入荷量は、月間全体では前年をかなり大きく上回ったものの、平年をやや下回った。 価格は、玉レタスは前月までの高値の影響から積極的な売り込みができず、量販店の特売なども少なく引き合いが強まらず、入荷増量に伴い月の後半に下落した。サニーレタスとリーフレタスも同様に引き合いが強まらず、価格は低迷した。月間のレタス類の価格は前年をかなり大きく下回ったものの、平年をかなり大きく上回った。
	きゅうり 	宮崎産が主体となり、高知産や徳島産の入荷もあった。中旬に悪天候で落ち込んだが、安定した入荷が続いた。長く続く野菜類全体の高値の影響により消費が鈍く、量販店での特売需要も少なく引合いが強まらなかったことから入荷量は伸び悩んだ。総入荷量は、月間では前年をやや上回ったが、平年をかなり大きく下回った。 価格は、高値だった前年を大幅に下回ったが、平年をかなりの程度上回った。
	なす 	千両系は高知産を中心に岡山産などの入荷があり、長なすは福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。各地とも上中旬にかけて悪天候となり、中旬の出荷量が落ち込んだ所があったが、下旬には気温も上昇し増量した。旬を追うごとに入荷増量し、総入荷量は、月間では前年、平年ともにやや上回った。 価格は野菜類全体の単価高の影響が残る中、全旬とも高値で推移した。月間全体では前年をやや上回り、平年をかなり大きく上回った。
	トマト 	熊本産と愛知産が主体となり、福岡産の入荷もあった。低温と干ばつの影響から着色遅れで後倒しとなっていたものが一気に出荷され、各地とも産地出荷量が多い状況が続いた。熊本産と福岡産の月間の入荷量は前年を大幅に上回り、愛知産も前年をかなり上回った。総入荷量は、月間では前年を3割以上上回り、平年をかなり大きく上回った。 価格は、気温がなかなか上らず消費が鈍く、入荷量が多い中で引き合いが強まらず伸び悩み、月間全体では前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回った。
	ピーマン 	宮崎産を中心に、高知産や鹿児島産などの入荷があった。上中旬はなかなか気温が上昇せず、悪天候もあって産地出荷量は伸び悩んだが、下旬には気温も上昇し増量した。総入荷量は、月間全体では前年、平年ともに4割以上上回った。 価格は単価高であった前年をかなり大きく下回り、平年をわずかに上回った。
	さといも 	愛媛産が中心となる入荷であったが、産地残量が少なく入荷量は伸び悩んだ。国産が少ないため、業務用を中心に輸入の中国産が入荷し、前年をかなり上回った。総入荷量は、月間全体では前年を大幅に下回り、平年を3割以上下回った。 価格は絶対量不足と野菜類全体の高値の影響により、高値で推移した。月間では、前年をかなり大きく上回り、平年を5割以上上回った。
	ばれいしょ 	丸芋は鹿児島産が中心となり北海道産の残量入荷もあった。鹿児島産の離島物が降雨の影響で産地出荷量が伸びず、月間の入荷量は前年を大幅に下回った。北海道産も徐々に切り上がり、旬を追うごとに減量となった。メークインは北海道産が中心となる入荷で、産地残量が少なく切り上がりも早く、入荷量が少ない状況が続いた。総入荷量は、月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は、前月までの高値の影響が残る中で入荷量が伸びず、高値で推移し下旬にはさらに上伸した。月間では前年を6割以上上回り、平年を3割以上上回った。
	たまねぎ 	北海道産の残量入荷が主体となり、新物の長崎産、兵庫産の入荷があった。長崎産は前月までの低温と干ばつの影響などにより生育が進まず、出遅れ、上中旬の入荷量は前年の半分以上となった。下旬には回復傾向となったが、月間では前年を大きく下回った。兵庫産も出遅れて上旬の入荷量は少なく、旬を追うごとに増量したが、月間では前年をかなり下回った。北海道産は残量が多く順調な出荷が続いたが、出荷自体は終盤で月の後半には減量となった。国産が高値であったため、業務用で輸入の中国産の入荷があったが、前年より少なかった。総入荷量は、月間全体では前年、平年ともにかなりの程度下回った。 価格は、野菜全体の高値の影響から、品不足で高値であった前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。

（執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹）

(4) 首都圏の需要を中心とした5月の見通し

3月には全国的に降雨があり、露地の大型野菜は遅れを取り戻しつつあるが、それでも全国的には干ばつ傾向と報告されている。好天が続く寒暖差があり、果菜類は生殖成長が旺盛であり、きゅうりを中心に果菜類も潤沢な出荷を取り戻すと予想される。この時期から夜温が高くなると、木ぼけ（茎葉ばかりが茂り、着果が悪くなること）になりやすいことや、5月末に梅雨が早めに始まるか空梅雨で推移するかなどにより、湿潤であれば、えだまめはいいスタートを切り、干ばつであれば高原キャベツが遅れるなど、展開が異なってくる見込みである。秋冬物の野菜出荷量は悪かったが、春野菜は順調にスタートし、市場価格は落ち着き、平年並みかやや高い水準で推移すると予想される。

根菜類

だいこんは、千葉産は11月下旬に播種したものの出荷が4月初旬から開始し、ピークは4月上旬から5月の大型連休頃まで、その後6月中旬まで続く見込まれる。寒さと干ばつの影響でLサイズ中心の仕上がりとなっており、作付けは減少傾向である。青森産の春だいこんは5月中旬から共選が開始し、東京市場へのお荷が始まる。盛夏期に減少するが、11月上旬までお荷が続く見込みである。ほぼ前年と同じ3月26日に播種が始まったが、強風や降雨があり、当面のお荷のピークは6月初め頃と予想される。Lサイズ中心と見込まれる。

にんじんは、静岡産が4月7日から東京市場へのお荷が開始した。11月前半に播種した分は問題なかったが、後半に播種した分は寒さでやや停滞し、ピークは4月10～20日と見込まれる。5月は例年より少なく、早めに切り上がると予想される。徳島産のお荷のピークは4月中旬から5月上旬までで、5月いっぱいのお荷が見込まれる。現状はMサイズ中心のSだが、4月中旬からMサイズ中心のLと肥大が予想される。前年がやや不作気味であったため今年のお荷量は前年を上回るが、平年並みと予想される。

葉茎菜類



キャベツは、愛知産は、降雨により肥大が回復し、1箱8玉入りと6玉入りの占める割合がそれぞれ40%となってきた。お荷量がこれまで70～80%ペースで来たのは、小玉が中心であったことによるが、今後のお荷量は回復が見込まれる。4月までは冬系が70%、春系が30%であったが、5月には春系も終わり初夏キャベツが中心になって、平年並みに追いつくと予想される。千葉産は2月に収穫される分が遅れて3月下旬にお荷されている。「金系201号」は4月15日頃までは少なめで、その後は増量し5月15～20日がピークとなる見込みである。その後減少するものの、20日過ぎからは中間タイプの品種が始まり、6月20日頃までのお荷が見込まれる。生育は順調で、5月は前年並みかやや多いと予想される。茨城産は例年どおり5月中旬から開始し、ピークは6月で、お荷は7月上旬までと見込まれる。現状までの生育は順調で、作付けも前年並みとなっており、品種は寒玉タイプである。

はくさいは、茨城産の5月のお荷量は4月より減少し、6月中旬をめどに終了する見込みである。春はくさいは3月下旬から順調に増え、品不足といった一時のひっ迫感はない。玉の肥大は順調で、平箱中心に4月上中旬がピークとなり、5月も例年並みのお荷が予想される。

ほうれんそうは、岩手産は気温の低さに加え強風が影響し、前年より遅れ4月20日過ぎから開始する。当面のピークは5月中旬から6月となり、作付けもお荷量もほぼ前年並みと予想される。群馬産は、低温と降雪で播種が遅れた。お荷は4月下旬から開始し5月後半に増えて来る見込みであるが、この露地作は不作傾向と予想される。本格的にお荷が増えるのは、6月の雨除け物からとなると見込まれる。埼玉産は、3月19日に降雪や降雹、あられなどがあり、トンネルを開けた状態であったため、葉の損傷などの被害があった。4～5月のお荷は例年より少なめの90%程度と予想され、5月中下旬から減少してくると見込まれる。

ねぎは、茨城産の冬ねぎは、高温・干ばつの影響により生育不良であったが、4月下旬からは12月初めに定植したトンネル物に代わり、潤沢な出荷ができると見込まれる。前年は3月に入っても低温が続いたことから、5月の出荷物の肥大が足らずに出荷量が伸びなかった。このため、今年はトンネル物を昨年より10日程度長くかけて保温したため、順調に肥大し、前年を上回る出荷量が予想され、特に5月中旬から急増する見込みである。埼玉産は4月に入り春ねぎとなるが、生育は順調である。ピークは4月上中旬で、5月には減少し4月の70～80%程度となると予想されるが、5月としてはほぼ平年並みかやや多い見込みである。6月に入ると夏ねぎになる。

レタスは、茨城産は、3月の降雨により肥大も良好で、4月初旬時点が出荷のピークとなっている。トンネル物と露地物の境目となっているが、4月下旬から減少してくるものの、5月いっぱいには出荷量がしっかりとあり、4～5月を平均すると平年並みとなる見込みである。群馬産の準高冷地物は4月10日過ぎから始まり、べたがけ物（保温・防霜などを目的に通気性のある資材をかけたもの）は、2月の降雪が多く定植が遅れた影響により、昨年より7日程度の遅れが生じている。当面のピークは5月の大型連休頃に1回目のピークとなり、その後一度減少し、5月下旬に再び増加が見込まれる。作付けは前年より増加している。長野産は3月に積雪したが、前年と同時期の4月20～25日に出荷が開始する見込みである。2月までの干ばつの頃は、圃場の準備が進んでいたため問題なく、非結球物は4月末から5月の大型連休にかけて本格出荷となり、結球物は連休頃から開始すると見込まれる。

果菜類



きゅうりは、埼玉産は4～5月に加温物が増えてくるが、無加温物は遅れている。5月の大型連休頃にピークが来て、その後は徐々に減少して推移すると予想される。5月としては前年並みかやや多い見込みである。群馬産は、気象変動による多少の出荷量のばらつきは予想されるものの、おおむね順調で4～5月も引き続き

安定した出荷が見込まれる。宮城産は、加温の促成物は地元市場へのお荷が3月10日から開始し、東京市場へは4月中旬から開始すると見込まれる。1回目のピークは4月下旬から5月上旬で、2回目は6月に入ってからと見込まれ、促成物は7月の1週目までで、その後露地物も始まる。干ばつで実が着くのが早く、今のところ生殖成長が旺盛である。

なすは、高知産は定植初期の高温や10月に花が多く咲いて樹勢が弱く、さらに11月には曇雨天が続いたことなどの影響により少なめのお荷が続いている。4月に入り回復しピークとなるが、その後いったん減少し、5月に入り再び増え、6月末頃に出荷が終了すると予想される。岡山産は、長期物は燃料代の高騰により理想通りの温度設定にできなかったことが影響し80%強のお荷となっている。4月に入ると増え、当面のピークは4月20日から5月で、さらに6月も多めのお荷が予想される。福岡産は長なすとなるが、現状は前年のお荷水準に届いていない。4～5月は増量期に入り、前年並みまで追いつき7月10日までのお荷となると予想される。栃木産は、加温の促成物は4月20日以降がピークとなり、6月下旬まで多いと予想される。無加温物は5月の大型連休頃から増えて11月まで続き、露地物も始まる7月の海の日（21日）頃が最大のピークになると見込まれる。3月までのお荷実績は前年を上回っている。

トマトは、熊本産は3月までは一定のペースで出荷され、大きなピークはなかった。例年の80～90%程度とやや不作傾向であるが、4月20日から増え、6月上旬から減少してくると予想される。愛知産は、例年並みのお荷となっており、当初の遅れは回復している。基本的に干ばつ傾向で、現状の着果については問題ない。4月中旬から本格的に増えて5月いっぱいまでピークとなり、お荷は6月20日頃まで続くと予想される。サイズはM・S中心となる見込みである。千葉産は、越冬物は7月に入り切り上がるが、前半は病気の発生もあり少なめで、5月も例年を下回ると予想される。春トマトは5月の大型連休頃から始まる見込みである。

ミニトマトは、熊本産は当初の遅れから回復し前年並みの出荷となっている。着果も問題なく、3月下旬から増加傾向となり、4～5月がピークとなり、7月10日頃までに切り上がると見込まれる。千葉産は、4月以降が作の後半となるが、6月までピークはない見込みで出荷量は前年の80～90%程度となると予想される。

ピーマンは、茨城産の春ピーマンは5月が一番のピークで、7月中旬までと予想される。温室ピーマンは6月いっぱいまでがピークとなり、低温傾向により肥大が遅れ前年の90～95%で推移すると予想される。宮崎産は前年並みの出荷となっている。2～3月が少なかったのは1月までの成り疲れによるもので、5月に年間最大のピークとなると予想される。6月には減少してくるが、例年並みの見込みである。

土物類



ばれいしょは、静岡産の「三方ヶ原男爵」は例年と同様に5月の連休明けから販売が始まる。天候上の問題なく順調で、6月上旬にピークになり、7月いっぱいの出荷が予想される。長崎産は4月10日から出荷を開始するが、寒さと干ばつの影響で7～10日の遅れになっている。当面のピークは5月の連休明けからで、6月いっぱい掘り取りする計画である。面積はやや減少気味で、前半物はやや小ぶりと予想される。

たまねぎは、佐賀産の早生^{わせ}物は4月15日から始まり5月中旬まで、中生^{なかて}は4月25日から6月初旬までとなる見込みで、気温の上昇により遅れは回復してきている。5月としては前年よりやや少なめが予想され、6月には田植えの作業が繁忙となるため、いったん出荷が減少すると見込まれる。Lサイズ中心と予想される。兵庫産は4月下旬から5月の初めにかけて出荷が始まるが、ほぼ前年並みのスタートである。早生のピークは5月の連休明けから5月いっぱい、中生は5月末頃から始まり7月にピークとなると予想される。千葉産は前年より7日程度遅く4月20日頃から始まる見込みである。3月下旬の試し掘りではMSサイズが中心であったが、4月初旬の雨によりさらに肥大し平年

並みに追いつき、出荷のピークは5月の連休明け頃と予想される。

その他



ブロッコリーは、福島産は5月連休明けから始まり、5月中下旬がピークとなり、6月いっぱい切り上がると予想される。作付けは前年並みである。愛知産は2月まで続いた干ばつにより前半の作が遅れ、2～3週間遅れたものが集中してきている。4月初旬頃にはその流れが一段落し、4月中旬から再度増え、5月に入りかなりの程度減少しながら切り上がると見込まれる。昨年の春ブロッコリーは病気により出荷が半減したため、今年は春作の作付けが減っているものの、少なかった前年を上回ると予想される。熊本産は3月初めにピークが来て、4月に入り端境を迎えている。春ブロッコリーは4月13日の週から始まり、5月の連休前までがピークで、5月中には終了に向かうと予想される。

カリフラワーは、茨城産の出荷は4月中旬から開始し、ほぼ例年どおりとなっている。作付けは前年並みで、生育は順調であり、ピークは5月下旬から6月初め頃までとなり、6月いっぱい切り上がる見込みである。

かぼちゃは、鹿児島産は2月下旬に交配が始まったが、交配前の低温と降雪により花落ちするなど10日程度遅れている。出荷は5月15日頃から始まり、ハウス物、小型ハウス物、主力のトンネル物となり、ピークは6月10日頃と予想される。品種は「えびす」中心である。

アスパラガスは、福島産は例年より7日程度遅れて4月から開始する見込みである。ピークは4月20日頃からの1週間で、5月の連休明けには切り上がる見込みである。作付けは前年の93%と減っている。夏芽は6月下旬から始まる見込みである。長野産は今年は積雪が多く、4月15日頃に始まった前年より、1週間以上遅れると予想される。ピークは5月の連休明けから5月いっぱいであり、前年作から判断すると株は充実している見込まれる。夏芽は6月下旬から出荷開始が予想される。

とうもろこしは、沖縄産は4月中旬から始まりピークは4月下旬となり、5月初旬に切り上がると予想される。作付けは例年よりも微増となっており、生育は若干の遅れがあるものの基本的に順調である。山梨産は、寒さの影響により前年より遅れているが、5月25日頃から始まると予想され、ピークは5月下旬から6月上旬である。今後の天候次第では前進することも見込まれる。作付けは微増であり、品種は「ゴールドラッシュ」である。宮崎産は4月に入り出荷を開始したが、東京市場での販売は5月中旬以降と予想される。作付けは減少している。年明け以降、干ばつ気味で水不足であるが、生育は順調である。品種は「ゴールドラッシュ」である。

えだまめは、静岡産は周年出荷の産地であるが、4～6月がハイシーズンである。基本的には、ハウス栽培で一部露地物がある。4月までは少なめで推移したが、今後は平年並みの出荷が予想される。埼玉産はトンネル物が、5月20日から始まりピークは6月に入ってからと見込まれ、作付けは前年並みである。千葉産はハウス物が早い生産者で4月20日過ぎから始まると見込まれる。露地物は5月の連休明けから開始し、6～7月がピークになると予想されるが、出だしのものは発芽率が悪かったためやや遅れている。

スナップエンドウ・絹さやえんどうは、福島産は、今年は積雪が多く雪解けの遅れから見通しづらいが、前年のスナップエンドウは5月25日、絹さやえんどうは5月20日から開始した。

そらまめは、愛媛産は10日程度遅れており、4月24日頃から開始し、ピークは5月3～5日頃と見込まれる。作付けは前年並みで、寒波があったものの大きな影響はなく、不作であった前年を上回ると予想される。

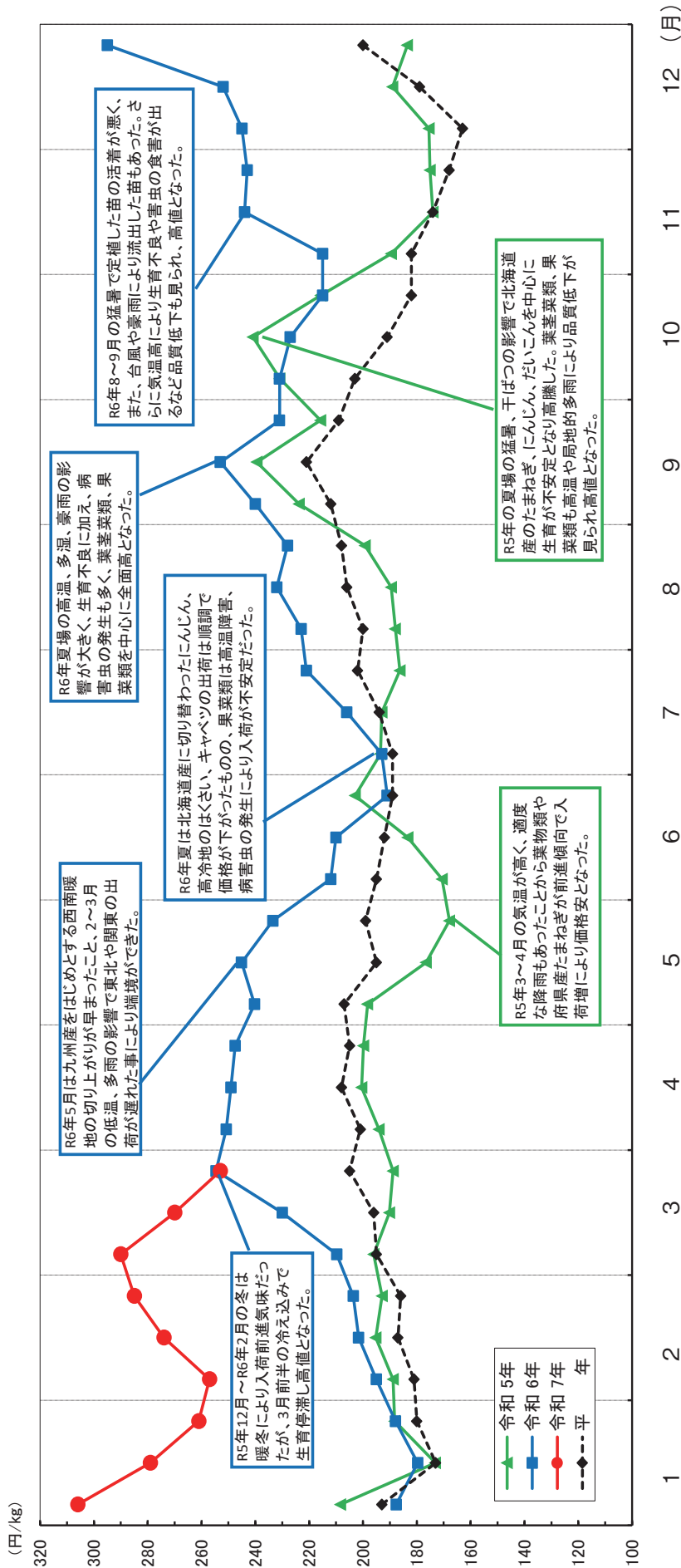
メロンは、茨城産は連休明けから「プリンス」が始まり、5月初旬はハウス物で、5月15～20日頃から露地物となり、ピークは5月下旬と予

想される。「貴味」は早い生産者でも5月15日頃からで、ピークは6月10日から6月いっぱいを見込まれる。作付けは前年の95%程度と若干減少しており、全体として7日程度遅れているが、着果そのものは順調である。

(執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)

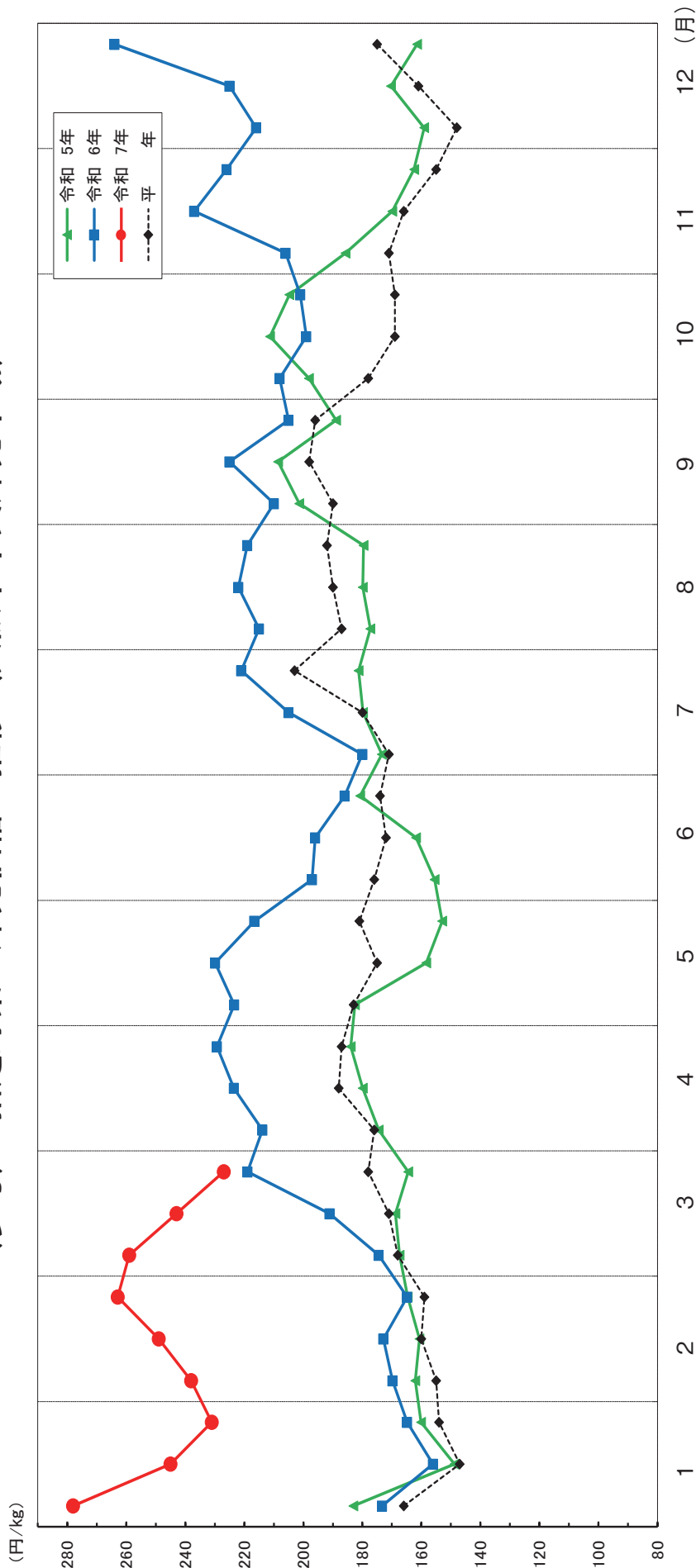


(単位: 円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬												
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175	189	184
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243	245	252	295
令和7年	306	279	261	257	274	285	290	270	253																											
平	193	173	180	181	187	186	195	196	205	201	208	205	207	195	199	195	192	189	189	194	202	200	206	208	212	221	209	203	191	182	182	174	168	163	179	200

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注1：平年とは、過去5力年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。
注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、定橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210
令和7年	278	245	231	238	249	263	259	243	227																
平	166	147	154	155	160	159	168	171	178	176	188	187	183	175	181	176	172	174	171	180	203	187	190	192	190
			</																						

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。